

主 題：必要な悲しみ

聖書箇所：コリント人への手紙第一 5章1－8節

できることなら、私たちは毎日を悩んだり苦しんだりすることなく、笑いながら楽に暮らしたい、困難は避けて過ごしたいと思います。また、日々の人間関係においてもいやな思いをしないでだれとも円満に行きたいと、そのような思いが私たちにはあります。しかし聖書は、私たちクリスチャンがある時には積極的に「悲しむ」必要があることを教えています。悲しむ結果になることが分かっているにもかかわらず、敢えてそれを選び取る必要があることを…。今日はそのことを学んで行きます。

### クリスチャンが罪に対してなすべきこととは？

「教会とは、神の愛が実践されている場所であるべき」だと言われます。確かに、救われて神の教会とされた私たちクリスチャンは、神がそうであるように、自己中心の愛ではなく、自己犠牲的な愛をもって周りの人たちを平等に愛そうと努めます。しかし、私たちが覚えるべきことは、「神の愛を実践することと、どんなことでも受け入れることとは違う」ということです。前回まで、このコリント人への手紙第一1～4章で、私たちはコリント教会の問題、分裂分派に関して、どこにその原因があるのか、私たちが守るべき一致について学んできました。分裂の原因はパウロやアポロといった教会のリーダーたちにあるのではなく、一人一人の罪、高慢であり自己中心であるその罪にあったことを見ました。

パウロはこの5章から、新しい問題について語り始めます。もちろん、これもコリント教会の問題に関するのですが、パウロは私たちクリスチャンが「罪」に対してどのように振舞うべきかを教えて行きます。そのことを私たちが正しく理解し実践して行かなければ、私たちの「教会」は神が与えてくださった最も大切な使命である「神の栄光を現わす」という証を世に対してできないばかりか、神からの祝福も失ってしまうのです。みことばを見ましょう。

「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。：2 それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。：3 私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行ないをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。：4 あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、：5 このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。：6 あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。：7 新しい粉のかたまりのままにしているために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。：8 ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種のはいらぬ、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。」

#### 1. 正しく罪を憎む 1－2節

私たちクリスチャンが罪に対して為すべき第一のことは、「正しく罪を憎む」ことです。

#### ◎「罪があつて当然」ではない！

確かに教会は「罪を赦された罪人の集まり」です。救われた私たちのこのからだには、まだなお、罪の性質が残っているために、私たちは罪を犯し絶えず罪との葛藤がありますが、その罪を「有っても当然」のように考えてはならないのです。コリント教会の中で起こっている分裂分派の問題を語った後、パウロは次に教会内で起こっていた信じられないような問題を指摘して行きます。それは「不品行」の問題でした（1節）。教会のメンバーのある者が自分の父親の妻を自分の妻にしているというのです。原語を見ると「ある人が父の妻をもっている」という表現で、それ以上の具体的なことは分かりませんが、当時の社会でも受け入れ難いようなことが教会内で行なわれていたということです。コリントの町については以前にも学んだように、当時非常に栄えた大きな町でした。商業や貿易が盛んで多くの人の往き来がありました。その町を見下ろすような山の上には大きな神殿があつて「アフロディート」という愛の女神が祭られており、そこには神殿娼婦がいて、町全体はこの神殿を中心に栄え、性的罪であふれていたのです。当時のことばで「コリントする」というのは「不品行を行なう」という意味だったのです。コリント教会はそのような不品行に満ちた町にあつたのですが、驚くべきことには、その不品行に慣れきっていたコリントの町の人でさえ行なわないような罪が教会のメンバーの中に見られたというのです。この1節の初めに使われている単語は「実際に、現に、全部、一般に」と訳されることばで、多くの聖書学者たちは、このことばから、教会内のこの問題が広く世間一般に広まっていたと考えます。実際に、

パウロはこの問題を、遠く離れたエペソで聞いています。このような不品行は当時のローマの法律でも禁じられていたことですが、それ以上に、クリスチャンには神に対する大きな罪でした。レビ記18：8には「**あなたの父の妻を犯してはならない。それは、あなたの父をはずかしめることである。**」とあり、申命記27：20にも「**父の妻と寝る者は、自分の父の恥をさらすのであるから、のろわれる。**」と教えられています。

### ◎パウロが最も嘆いていることは？

「罪が教会の中でなおざりに（黙認）されていること」です。2節に「誇り高ぶっています」とありますが、教会はその罪を知っていて黙認しているだけでなく、「**そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかった**」のです。これは「むしろ悲しむべきではなかったのか！そのような者をあなたがたの中から取り除くために…」という文章なのです。それは「取り除く」ということよりも「悲しむ」ということばの方により重点が置かれているのです。コリント教会が不品行を行なっている者を正しくさばくその努力さえしなかった、罪をさばこうとしなかった、とパウロは嘆いているのです。未信者にも見られないような不品行の罪が、教会の中で黙認されていること、それを嘆いているのです。

ある聖書注解者はこの「誇り高ぶっている」ことと罪を犯し続けている者をさばかないこととを関連づけて、このように解釈しています。つまり、単に教会が罪を犯し続けている者を見逃しているだけでなく、「自分たちはそのような者をも神の愛によって寛容に対応している、受け入れているのだ」と自慢げに考えていたと言います。罪をさばかないことを自分たちを誇る理由にしてしまっているということです。パウロはIコリント3：16、17で「**あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。：17 もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。**」と教えています。私たちは神の神殿（＝教会）の聖さを守る必要があるのです。

1－4章でも学んできたように、コリント教会の問題は何だったのでしょうか？コリントという罪に満ちた場所に教会があったから罪の誘惑が多かったことでしょうか？いいえ。コリント教会のメンバーが聖書をまだよく学んでいなかったからでしょうか？それでもありません。一番の問題は「自己中心」でした。言い換えれば「高ぶり」です。コリント教会の人たちは何でもよいから自分を誇りたかったのです。彼らは不品行を神がどのように見ておられるかを十分知っていたはずですが、1：5を見ると「**というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。**」とあり、その不品行が罪であることはよく分かっていたのです。それなのに正しい対処をしなかった、なすべき正しいことを知っていながらしない！とパウロは叱責するのです。5：9に「**私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。**」とあるように、パウロはすでにコリント教会にそのことを教えていたのです。

私たちはある時には「悲しむ」ことが必要です（2節）。教会のメンバーが罪を犯して、その罪を悔い改めない時がそうです。ヤコブ4：9を見てください。「**神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。：9 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。：10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。**」。これはクリスチャンでありながら罪を犯し続ける者への警告です。苦しみなさい、悲しみなさい、と言われてるのは、信仰を持ちながら罪を犯し続けている者たちに対してです。彼らに必要なことは10節にある通り「へりくだる」ことです。コリント教会は「罪を罪として憎む」べきだったのです。それが、一時的に自分たちの悲しみになることであつたとしても…。なぜなら、彼らはもうすでに「聖なる者」とされたのだからです。「**コリントにある神の教会へ。すなわち、私たちの主イエス・キリストの御名を、至る所で呼び求めているすべての人々とともに、聖徒として召され、キリスト・イエスにあって聖なるものとされた方々へ。主は私たちの主であるとともに、そのすべての人々の主です。**」と1：2にもある通りです。

救われたクリスチャンは小さなことでも罪に対して抵抗がありますが、コリント教会の人たちは「自己中心」や「高ぶり」のために、神が自分たちの成長のために遣わしてくださったパウロやアポロといったリーダーたちをも、自分たちのプライドのために利用しようとし、教会内で起こっている問題に対しても自分たちの考えで判断し、神の命令を軽んじたのです。その結果、コリントの教会全体が罪に対してルーズになってしまい、聖さにおいても、正しさにおいても、世の模範となるべきであつた教会が、世の中以上に罪に汚れた状態になってしまい、神の証を失っていたのです。

## 2. 正しく罪をさばく 3－5節

クリスチャンは罪を憎むだけでなく、それを正しく神の前に処理する必要があるのです。パウロはこの手紙を書いた当時、エペソにいながら（Iコリント16：8「**しかし、五旬節まではエペソに滞在するつ**

もりです。）」、この罪の処理をしたというのです。

### ◎パウロがすでに行なったさばきとは？

教会からの除名、あるいは交わりを絶つことでした。5節に「サタンに引き渡したのです。」とありますが、Iテモテ1：20にも「その中には、ヒメナオとアレキサンデルがいます。私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。」と同じような表現があります。この当時のクリスチャンたちは、この世界を支配していたのはサタンであると考えていました。ヨハネ12：31「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。」。エペソ2：1-2「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、：2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」コロサイ1：13「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」。Iヨハネ5：19「私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。」教会とは唯一サタンの支配が及んでいない神の支配下であったのです。そのようなところから、サタンに引き渡すということは、教会からの「除名」や「交わりを絶つこと」と考えるのがパウロの真意に沿っているでしょう。

### ◎その目的と動機

その人が救われるためであり、その人を愛するからです。神の愛を教える教会が、なぜ厳しい除名や交わりを絶つなどの罰を与えるのでしょうか？5節に「それは彼の肉が減ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」とあるように、その人が本当の救いを得るためです。なぜなら、本当に救われ神に変えられた者は、神を愛し神に従うはずだからです。それが無いということは、その人の信仰をもう一度吟味する必要があるのです。それが「除名」であり、マタイ18：15-17で教えられている「教会戒規」なのです。「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。：16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。：17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」。戒規の目的は、その人が信仰を吟味することによって悔い改め、より確実に本当の信仰を持つことによって永遠のいのちをもつことができるためです。そして、教会の交わりへと回復されるのです。「彼の肉が減ぼされるため」とは、教会との交わりが絶たれたことによってその人が反省し、肉の欲求が絶たれるという意味です。

私たちは神が定められた「教会戒規」というルールをしっかりと理解して適用することが必要です。その人がもう教会に来なくなるのでは？とか、厳しすぎて証にならない、などという人間的な観点ではなく、神が教えてくださっている最良の方法で対処すべきなのです。これも多くの場合、悲しみを伴うものです。しかし、私たちはその人が罪を悔い改め、本当に救われることを願うがゆえに、また、私たちの主である神に従うゆえに、正しく罪に対処する必要があります。ヘブル12章でも「懲らしめ」について教えられていますが、それと同じように、私たちは本当にその人を愛するなら、その人の罪を黙って見過ごすことはしないはずで、ヨハネは第三の手紙で自分の愛する者にこのように教えています。11節「愛する者よ。悪を見ならわなくて、善を見ならいなさい。善を行なう者は神から出た者であり、悪を行なう者は神を見たことのない者です。」と、正しく罪をさばくことはその人を愛するがゆえなのです。だから、私たちはときにそれを行なうことが苦しみであっても、勇気をもって愛をもって神に従って行く必要があるのです。

### 3. 正しく罪を清めて行く 6-8節

コリント教会がすべきであったことは、教会においても自分のうちにおいても罪を清めて行くことです。パウロはここで当時の人たちに分かりやすい説明をしています。「ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませる」という表現は、ガラテヤ5：9にも「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。」とあります。また、パウロがこの表現を使ったのは、過越の祭りの習慣と関係があったからです。パウロがこの手紙を書いていたのが、ちょうど過越の祭りの時期でした（Iコリント16：8「しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。」）。出エジプト記12：15「あなたがたは七日間種を入れないパンを食べなければならない。その第一日目に、あなたがたの家から確かにパン種を取り除かなければならない。第一日から第七日までの間に種を入れたパンを食べる者は、だれでもイスラエルから断ち切られるからである。」、13：6-7「七日間、あなたは種を入れないパンを食べなければならない。七日目は主への祭りである。：7 種を入れないパンを七日間、食べなければならない。あなたのところに種を入れたパンがあつてはならない。あなたの領土のどこにおいても、あなたのところにパン種があつてはならない。」と、このように過越の祭りの用意として、まず、パン種を取り除くということをしたのです。というのは、わずかのパン種が全体を膨らませるということから、パン種がどんどん大きくなって行く悪いものというイメージで語

られています。祭りではパン種が除かれてから過越の小羊がほふられるという順序がありました。その過越の小羊であるイエスがすでにほふられたのに、あなたがたはまだ、自分のパン種を取り除いていないではないか！という意味なのです。

時々、いろいろな教えの中で「山頂に至る道はたくさんあっても行き着く場所はみな同じ、だから、どの教えを信じてもいいのだ」ということを聞きますが、本当にそうでしょうか？確かに、聖書以外にも立派な有益な教えはあるでしょう。しかし、そこに救い、天国への道があるのでしょうか？私たちが何かの行ないをしたり、何かを唱えることで天国に行けるのでしょうか？それで、私たちが行なってきた数々の過ち、罪を清算できるのでしょうか？「罪には必ず罰が伴う」と聖書は教えます。罰とは何らかのペナルティです。聖書には明確な根拠があります。キリストのいのちによって「贖いが十分になされた」のです。その証拠がイエスの復活です。罪の赦しはこのイエス以外にはないのです。そして、イエスに優る犠牲はないのです。

### ◎パン種とは？

罪人ではなく罪を指しています。罪はまさしくパン種のように大きくふくらんで行きます。私たちは神の助けによって罪をしっかりとコントロールしないと、いつか、その罪に支配されてどんでもないことになってしまいます。確かに、この世界を創造された唯一まことの神は、私たち人間を愛され、そのために救いを用意してくださいました。しかし、だからといって神はすべての人を救って、地獄という永遠のさばきからすべての人を救ってくださるとは、聖書はそのようには教えていません。そこには条件があります。それは、このまことの神を信じ、自分の救い主として受け入れることです。

イエスは弟子たちにこのように言われました。ヨハネ13：10「**イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」**と、イエスは神を信じ神にきよめられた者の話をしておられるのです。救われた者は、神によって過去、現在、未来、すべての罪は赦されました。しかし、日々の生活において罪は私たちの周りに存在しますから、その都度悔い改めて告白し赦していただく、すなわち、きよめられて行きなさい、足は洗う必要があると教えられているのです。

### ◎私たちがすべきことは？

個人としても教会としても、罪をきよめてゆくことです。救われた一人一人が日々罪をきよめて行くのと同様に、その救われた者たちが集められている教会に対しても、同じことを命じておられるのです。教会も日々きよめられて行く必要があるのです。罪を犯した者を教会から取り除きなさい、過ちを犯した者を教会から閉め出さなさいと教えているのではありません。「罪」を閉め出さなさいと教えられているのです。教会から除名するように命じられているのは、神の前に罪を悔い改めることのできない人です。そうすることによって教会はきよめられ、神のために用いられて行くのです。また、それをしない教会は証を失い祝福はないのです。

あなたの罪は清算されているでしょうか？聖い神から「この者の罪はすべて清算されている」と言っただけでいいのでしょうか？